

『廣大難思の大慶喜』より抜粋

もう一步進みなさい

一、死後の往生を楽しむのが 第二十願

二、廻向が空手形が二十願

三、慶べないのが二十願

四、真仮の水際の立たないのが二十願

五、実機の見えないのが第二十願

六、難信の法を知ら<sup>し</sup>ないのが第二十願

一 死後の往生を楽しむのが 第二十願

自分は第十八願絶対他力に帰入していると自惚れています。みな他力の真似をしているだけで実機が救われていないから、みな方便化土に停っているのです。

法蔵菩薩の本願の上に方便と真実の三願があり、釈尊の説教の上に方便と真実の三部経があり、聖人の実地の求道の上に三願転入が教えてあるのに、皆これを見捨てて第十八願の真似をしているのですから開発した人がいないのです。

浄土真宗は往生浄土、彼土得証が据わりではありませんが、この世はどうもなれないではありません。正定と滅度は二益であります。現在の延長が未来ですから、現在開発していない者は、未来の弥陀同体の証果は得られません。それに第二十願の行人はこの世は浮世だ、この世は一生涯苦勞をしても暫くの間で、後に無量寿国に生れさせて貰って、尽きせぬ楽

しみをさして頂くのだと、死んだ先の楽しみを当にさしているのです。それではこの世を逃避する敗残者で、現当二世の幸福にはなりません。

小坂の善恵房が、「尊いことだ、有難いことだ、念仏のおかげで死にさえすれば花降る浄土とは、勿体ないことだ」と言われたのに対して、善信房が「善恵房様、貴方は死んでお浄土に参るのがそんなに有難いですか、私はこの世で助かったとは猶有難いです」「何を仰る、浄土門は彼土得証ではありませんか」「それは判っていますが、今心が往生（開発）

していなければ、死後の往生は当にならないではありませんか」

これが三大論争の一つで、余りにも有名であるけれども、実地に求道して開発した人がないから、皆善恵房の味方をして、聖人の真意の平生業成を体験した人がいないではありませんせんか、もう一歩進んだ境地に第十八願の世界があるのですよ。

往生おうじようと言いえば死しぬことにしか取とらないが、よい方かたにも取とれますよ。世間せけんでも悪い方わるほうにとつ

てみましょうか。坊主ぼうず、貴様きさま、道楽どうらく、極道ごくどうとは罵倒ばとうした言葉ことばですけれども、善い方よほうにとれば、

大坊だいぼうの主ぬし、尊とうといお方かた、道みちを楽たのしむ人にん、道みちを極きわめた方かたとしたら尊そんけい敬けいした言葉ことばになるのですよ。

往生おうじようの二字にじを往いき生うまると、とれば死しんでから、生いかされて往ゆくと読よめば平生へいぜいごうじよう業成み、皆みなさん

は仏智ぶつちに不思議ふしぎに生いかされましたか、摂取せつしゆされましたか、心眼しんがんを開ひらかして頂いただきましたか、

身体からだが死しんでから身体からだが極楽ごくらくに参まいるのですか。死骸しがいを家族かぞくの者ものは泣ないて見護みまもっているではあ

りませんか。焼やけば灰はいになり、埋うめれば土つちになり、白骨はつこつを残のこして置おくだけではありません

か。魂たましいが業ごうだけ荷になうて次つぎの世界せかいに飛とんで行いき、業ごうの裁さばきを受うけて、惑業わくごう苦くで流転るてんして行いくの

ではありませんか。自分じぶんの蒔まいた種たねは自分じぶんで刈かり取とるから自業自得じごうじとくと言いっているではありま

せんか。それを地獄じごくというのですよ。間ひまなく苦くるしんでいるから、今いまが無間地獄むけんじごくではありませ

んか。無理むりに死しんだ先さきのことにせず、過去かこから現在げんざいに來きたとみればよいでしょう、昨日きのうが

過去、今日が現在、明日が未来なら、出た息が過去、入っている息が現在、入る息が未来、毎時、毎日、毎年に、過去現在未来があるとすれば、今の一息に心眼を開けば仏智が満入して、無上涅槃を得る原因を獲得するから死後の仏果は当然ではありませんか。それに死んだら、死んだらと、先に延ばしているのは、現在目的を達成していないから未来に希望を持たしているのですよ。

信前二十願の人は、今決定心を得ていないから、死んだらお助けと言うので、心の往生を知らないのです。信後の十八願の行人は、今自力が尽きて他力不思議に生かされているから、これを心命終、不体失往生というのです。今心が即得往生さして頂いているから現在が楽しめるのです。今三世の業障の罪が消えて、等正覚の位に住し、弥勒菩薩よりも一足先に妙覚果満の境地に至る約束が成就したのですから、再び迷わぬ身にさして頂いた大満足、人世受生の果報者、十方法界の功德を全領して身も心も南無阿弥陀仏、ご恩返しが爪

の垢<sup>あか</sup>ほども出来<sup>でき</sup>ていないことを知ら<sup>し</sup>されて、身命<sup>しんめい</sup>を賭<sup>と</sup>して猛進<sup>もうしん</sup>さして頂<sup>いただ</sup>くのです。心身共<sup>しんしんとも</sup>に張り切<sup>はき</sup>っていますから、愚痴<sup>ぐち</sup>をこぼす暇<sup>ひま</sup>もなく、病氣<sup>びょうき</sup>の侵入<sup>しんにゆう</sup>する隙<sup>すき</sup>も無く、溢<sup>あふ</sup>れる慶<sup>よろこ</sup>びに満ちて使命<sup>しめい</sup>を果た<sup>は</sup>さして頂<sup>いただ</sup>いているのが第十八願<sup>だいじゅうはちがん</sup>の実行者<sup>じつこうしや</sup>です。

## 二 廻向<sup>えこう</sup>が空手形<sup>からてがた</sup>が二十願<sup>にじゅうがん</sup>

名号<sup>みょうごう</sup>に眼<sup>め</sup>をつけたのが第二十願<sup>だいにじゅうがん</sup>で、第十九願<sup>だいじゅうがん</sup>の諸<sup>もろもろ</sup>の功德<sup>くどく</sup>を修<sup>しゆ</sup>する桁<sup>けた</sup>から一歩前進<sup>いっぽぜんしん</sup>して、善<sup>ぜん</sup>の本<sup>もと</sup>、徳<sup>とく</sup>の本<sup>もと</sup>たる名号<sup>みょうごう</sup>には、万善<sup>まんぜん</sup>万行<sup>まんぎやう</sup>恒沙<sup>ごうじや</sup>の功德<sup>くどく</sup>が籠<sup>こも</sup>っている、諸<sup>もろもろ</sup>の善法<sup>ぜんほう</sup>を撰<sup>せん</sup>し、諸<sup>もろもろ</sup>の徳本<sup>とくほん</sup>を具<sup>ぐ</sup>してあるから、御文章<sup>ごぶんしやう</sup>にも「さのみ功能<sup>くのう</sup>のあるべきともおぼえざるに、この六字<sup>ろくじ</sup>の名号<sup>みょうごう</sup>の中には無上<sup>むじやう</sup>甚深<sup>じんじん</sup>の功德利益<sup>くどくりやく</sup>の広大<sup>こうだい</sup>なること 更に極<sup>きく</sup>まりなきものなり」と書<sup>か</sup>いてある、広大<sup>こうだい</sup>なことだと、有難<sup>ありがた</sup>がつているのを信仰<sup>しんこう</sup>と思<sup>おも</sup>っているが、それは書<sup>か</sup>いてあるので、自分<sup>じぶん</sup>の心<sup>こころ</sup>に仏智<sup>ぶつち</sup>が満入<sup>まんにゆう</sup>した慶<sup>よろこ</sup>びとは違<sup>ちが</sup>うから、慶<sup>よろこ</sup>びは直<sup>す</sup>ぐに消<sup>き</sup>える、広大無辺<sup>こうだいむへん</sup>の徳<sup>とく</sup>を貰<sup>もら</sup>いましたか。廻向<sup>えこう</sup>すると書<sup>か</sup>いてあるではないか、書<sup>か</sup>いてあるのは信樂開発<sup>しんぎようかいほつ</sup>した人<sup>ひと</sup>に廻向<sup>えこう</sup>すると書<sup>か</sup>いて

あるので、貴方は廻向して貰いましたか、何時貰うのですか、何を貰いましたか、無上甚  
深の広大な功德を頂いたのなら、毎日が感謝の生活が出来るでしょうね。何を貰ったか、頂  
いたか、調べてご覧なさい。本当に廻向して貰ったのなら、精神的の大満足を得て、不平も  
なければ苦悩もない、大福長者の生活が出来ますか。それができなければ話だけの空手形で  
すよ。

南無阿弥陀仏をとなふれば　この世の利益きはもなし

五濁悪世の有情の　選択本願信ずれば

不可称不可説不可思議の　功德は行者の身にみたり

とありますが、きわもないご利益を頂いていますか。どんなご利益を貰っていますか、  
不可称不可説不可思議の功德とは、数限りもない無限の功德と言うことですが、貴方の身に

満ちておりますか。こう問われますと何を貰っているか判らん、空手形を貰うてのぼせておいでになるから、のぼせをさげてあげると、大沼の奴は他人の信仰を崩して廻る異安心だと、自分の氣に入らないことを言うから攻撃されるが、真宗の道俗は何を貰っておられるのですか。不可称不可説不可思議の苦毒は行者の身に満てりで、朝から晩まで不足や愚痴を並べ、晩から朝まで怨みや呪いで生活し、猛火に包まれ猛毒を吐きつつ日暮しをしてはいませんか。それでこの世の利益きわもなしといえるでしょうか。我々は凡夫だから、三毒の煩惱は絶えず暇なく、臨終捨命の時まで嘔き出るのだと平気でおられるが、それなら三世の業障一時に罪消えてとありますが、何処で一時に罪は消えるのですか。念仏を称えながら、宗教を聞きながら、益々煩惱は猛威を振るうているではありませんか。それは言葉だけ覚えた贗物の信仰だからですよ。廻向するという空手形を眺めている二十願の方便の桁にいるのですよ、十八願の境地に達してはいないのでから、必死の求道をなさいよ、お聖教の



文句を合点しているだけですから、煩惱がご恩を喜ぶたねになっていないのです。選択

本願信ずればですよ、金剛の信心を獲得すればですよ。合点したのでは駄目、机上の空論で

は駄目、死んで助かると思っている人は駄目、感情だけで宗教を弄んでいるので実機が照ら

し出されていない、実機が見えていないのに仏凡一体になる筈がない、地獄一定が極楽

一定になるので、本当に堕ちた実感のない者が本当に助かった体験のある筈がない、本当

に体験さされていらないから大慶喜がないのです。皆素直な真似をしている贗物だから感情

は助かった積りでも心の本尊が流転しているから慶ばれないのです。

唯除逆謗と捨てられた実機が、聞即信の一念で開発し、仏凡一体になった人が摂取され

たので、この世の利益きわもなし、現生に必ず十種の益を得て、大満足の生活ができるので

す。見る物聞く物がみな仏法となつて、一切を拝みつつ感謝の生活ができるのです。煩惱が

あるから慶ばれないのではない、摂取されていない、首だけ十八願に入つた積りでも、背中

は二十願の桁にいる贗物だから悦ばれないのです。仏智が満入していないから慶ばれないのです。廻向する廻向するの掛声ばかりで、空手形だから慶ばれないのです。親の念力が届くまで求道しなさい、晴れて大満足できるまで真剣に求道しなさい。いざ真剣に求道しようとすると知識のいないことに驚くのです。血みどろの求道を教えてくれる知識はおりませんよ。しかし阿弥陀さまにはご油断がないから、悩めば必ず開ける世界があります。聞いて知って覚えたのが第二十願の方便の桁です。この位喜ばれるから悪い処へは行かないだろうと喜ぶ心を踏台にしているのが、信前の雑修の桁ですよ。もう一歩進んだ処に難中の難の関所があるのです。実地の体験をする関所があるのです。そこを突破さされた処に、第十八願の絶対他力の大慶喜の世界があるのです。

### 三 慶べないのが二十願

算盤でも、一の桁と千の桁と珠を一つはじいても九百九十九の違いがありますよ。あるお

ばあさんが歎異鈔たんにしやうの話を聞いて「念仏ねんぶつは、まことに浄土じやうどに生るるたねにてやはんべるらん、また地獄じごくにおつべき業ごうにてやはんべるらん、総じてもって存知ぞんちせざるなり」と聖人しやうにんが仰おほせられたそうなが、私も何にも知らないのだから丁度ちやうどよいといったそうなが、知らないようが違ちがうのです。信仰しんこうの入口いりぐちで何も知らないのと、奥義おうぎを究めて知り尽くして、用事ようじがなくなつて知らんと言われたのと桁けたが違いますよ。世間せけんで無学むがくといえは馬鹿ばかの替名かえなですけれども、仏教ぶつぎやうでは何もかも勉強べんぎやうし尽つくして、もう勉強べんぎやうすることがなくなつたのを無学むがくと言いいますよ。

歎異鈔たんにしやうの九節目くせつめでも、真宗しんしゆうの信前しんぜんの入口いりぐちにいる人が、煩惱ぼんのうが放題ほうだいに出でて、死しにともないのが腹一杯はらいっぱいで、感謝かんしゃ法悦ほうえつのない人間にんげんが自分じぶんの実機じつきを都合つごうよく隠かくす隠れ蓑みとは違ちがうのですよ。信後しんごのお二人が暗い灯火くらしびの下で、聖人しやうにんさま、廣大無辺かうだいむへんのお慈悲じひに生かされながら、三嚴さんげん二十九種しゆの莊嚴しやうげんの美しさを聞かされながら、急いそいでお浄土じやうどに参まいりたい心こころも発おこらず、下々げげの凡夫ぼんぶが大般涅槃だいぱんねはんの証果しやうかを得ると安心あんしんしながらも、踊躍ゆやく歡喜かんぎの心こころも出ないとは、何なんと娑婆しゃばに執着しゆうちやくして

いるものでしょうか。唯円ゆいえんよ唯円ゆいえんよ、お前まえと俺わしは同じ心おな　こころを持って、いる浅あさましいものだなあ、  
麦飯むぎめしを食たべても娑婆しやばにおりたい、死しにたいことは一寸ちよつともないが、力尽ちからつきこの命いのちが終おわるとき  
には、安養あんようの浄土じようどに帰かえらして頂いたく、落おち着つく先さきがあるとは何なんと尊とうといことであろうか、いくら  
尊とうとい楽たのしい世界せかいでも行いったことがないのだから、娑婆しやばの名残なごりはつきないが、待まち続つづけて下くだ  
さった親おやの里さとに帰かえらして頂いたくとは喜よろこばぬにつけても喜よろこばずにはいられないと、大おおきな喜よろこびに  
変かわっているのですよ。

苦く抜ぬけした二人どうぎようの同行みちが、道みちで出逢であうて、「どうじやろうかのう」「さあどうじやろうか  
のう」と頭あたまをさげ合あつてお念仏ねんぶつして別わかれたら、聞きいていた未信みしんの同行どうぎようが、「あの人達ひとたちは苦く抜ぬ  
けをしているかと思おもつたら、心配しんぱいそうにあんなに言いったが、後生ごしやうが心配しんぱいになるのだろうか」  
と言いったそうなが、言葉ことばは不安ふあん、心配しんぱい、疑うたがいのように聞きこえるけれども、凡夫ぼんぶが仏ほとけになれる  
とは、どうじやろうかのう、さあこれが正定聚しやうじやうしゆの仲間入なかまいりとは想像そうぞうもつかない不思議ふしぎの世界せかい

じゃ、どうじゃろうかのう、とは言葉にかけられない境地を言っているのではありませんか。

真宗の道俗は喜ばれないのを手柄のように、第九節を楯に、鬼の首でも取ったように安心しています、第九節はお二人の信後の懺悔であります、信前の者の気休めに使うお言葉ではありませんよ。

もう一か所、聖人が喜ばれないと言われた場所が化土巻にありますよ。「真に知んぬ、専修にして雑心なる者は大慶喜心を得ず」真に知んぬとは、本当にそうであつたなあ、信後に入つて気がついたのですよ。専修にしてとは、脇目を振らず一心不乱に名号を修してはいるけれども、雑心なる者とは、心に不安があり二の足を踏んでいる者は、大慶喜心を得られない、本当に信前の楯にいる時は、名号を称えてはいるけれども、心に心配があるから手放して喜ばれなかったが、今信後に入ってみれば、こうまで慶喜することが出来るとは

不思議であつたと、信前の二十願の境地の喜ばれないのと、信後の十八願の喜べる境地とを、僅かな言葉で表現しておられるのですよ。

真宗の道俗が名号に目がついて称えてはいるけれども、皆信前の二十願の桁にいるのだから、尊い名号を眺めているので仏智が満入していない、廻向が届いていないから喜びがないのです。

聖人が喜べると仰ったお言葉を並べてみましょうか。

1 聞くとおところを慶び、獲るところを嘆ずるなり

2 真実の行信を獲れば、心に歡喜多きがゆえに、これを歡喜地と名づく

3 獲信見敬大慶喜

4 証歡喜地生安樂

5 慶喜きょうき一念相応いちねんそうおう後ご

6 ここをもつて極惡深重ごくあくじんじゅうしんじゅうの衆生しゆじやう、大慶喜心だいきやうきしんを得え、もろもろの聖尊しやうそんの重愛じゅうあいを獲うるなり。

7 これ信樂開発しんぎやうかいほつの時剋じこくの極促ごくそくを顯あらわし、廣大難思かうだいなんしの慶心きやうしんを彰あらわすなり

8 歡喜かんぎというは、身心悦予しんしんえつよを形あらわすの貌かおなり。

9 心多歡喜しんたかんぎの益やく

10 慶よろこばしきかな、愚禿ぐとく、仰あおいでおもんみれば、心しんを弘誓ぐぜいの仏地ぶつじに樹たて、情じやうを難思なんしの法海ほうかいに流ながす。

11 常没じやうもつの凡夫人ぼんぷにん、願力がんりきの廻向えこうによりて真実しんじつの功德くどくを聞きき、無上むじやうの信心しんじんを獲うれば、すなわち大慶喜だいきやうきを得え、不退轉地ふたいてんじを獲う。

12 歡喜かんきというは、歡かんは身みをよろこばしむるなり、喜きは心こころをよろこばしむるなり。

私が一寸調ちよつとしろべただけでも、聖人しょうにんのお言葉ことばの中なかに喜よろこばれるという文字もじがこれだけあるのに、

真宗しんしゅうの方々はこれが見みえないのでしようか。読よんでも自分じぶんにないからピンと来こないのでしょ

うか。慶よろこばれる方が喜よろこべないと懺悔さんげされるのは、奥おくゆかしいお言葉ことばだけれども、慶よろこばれな

い者が喜よろこべないと平氣へいきでいるのは横着おうちやくで、乞食こじき桃水とうすいの真似まねをして、桃水とうすいになりきらずに

乞食こじきになるのが関せきの山やまですよ。

入学試験にゅうがくしけんにパスしても議員ぎいんに当選とうせんしても感激かんげきして晴はれているのに、鬼おにが仏ほとけになるという

一大事いちだいじの解決かいけつがついても晴はれたか晴はれぬか水際みずぎわが立たたないとは、解決かいけつがついてない証拠しょうこです

よ。そう書かいてある、それは体験たいけんされた方が書かかれたので、貴方あなたは読よんで感情かんじようが調子ちようしを合あわ

しているだけで本性ほんしやうは流轉るてんしますよ。貴方あなたは凡心ぼんしんで、そうかそうかと合点がってんして理解りかいの出来できた

のを他力廻向たうりきえこうの信仰しんこうと思おもっていらっしやるが、それは概念がいねんの遊戯ゆうぎであって、うんともすんと



も言いわないあなただの実機じつきが開発かいほつされた時ときでなければ、他力たうりき不思議ふしぎではありませんよ。即ちすなわ  
凡心ぼんしんの、聞きいたも知しったも覚おぼえたも、みな学問がくもんであり智恵ちえであり理解りかいであり計はからいであつた  
と言ことば葉りくつや理屈りくつが絶たえた時とき、つきた時とき、往生おうじようの望のぞみが絶たたれた時ときが、仏智ぶつちの不思議ふしぎと一体いったいにな  
るのですから、凡心ぼんしんがつきて仏心ぶつしんに生いき上あがるのですからこれほど難むづかしいことはありません  
が、これほど明あきらかなことありません。だから信前しんぜん信後しんご、二十願がんと十八願がんの水際みずぎわ、角目かどめが  
鮮あざやかに諦得たいとく出来るのです。だから大慶喜だいきようきがあるのです。

晴はれたか晴はれないか凡夫ぼんぷに判わかるものと仰おつしやる方は、話はなしを聞きいていだけ晴はれていないか  
ら判わからないのです。逆謗ぎやくほうの屍しかばねが自分じぶんの実機じつきであるとさえもわからない位の程度くらいていどの低ひくい信仰しんこうで  
すから、狼おおかみが羊ひつじの皮かわをかぶつて素直すなおな真似まねをしている贗物にせものです。救すくわれてもいない信前しんぜんの者もの  
が、摂取せつしゆされて懺悔さんげしておられる信後しんごの方かたのお言葉ことばの真似まねをしているのでは、木きに竹たけを接つい  
だようなで、何年経なんねんたつても心こころの底そこに往生おうじように對たいする不安ふあんが残のこるのです。それで自分じぶんの機きを見るな

見るな、出来上がった法を素直に聞けと教えているのが、方便、信前、二十願の法頓根漸の  
他力の中の自力です。そこを突破さして頂くのが難中の難です。いかに自力の機執が浄尽さ  
れることが難しいか、そのしこりが腹にある間は顔で笑顔をしていても、出て行く後生とな  
れば不安の黒雲が湧き出るから、喜びが出ないのです。それを二十願の桁にいると言うので  
す。法を見てよし機を見てよしにならねば、第十八願の行者、真の仏弟子ではありません。